

1925年のアメリカ文学

大塚智詩

第一次世界大戦が終わり戦後の未曾有の好景気からその栄華を極める 1920 年代のアメリカ社会、人々はその繁栄に酔いしれていた。彼らはアメリカ社会の光の部分ばかりに目を向け、その闇の部分である負の側面が見えなくなっていた。あるいは不都合なものが存在しても、それらはなかったものとして社会から抹殺されていた。やがてその栄華は 1929 年 10 月 24 日に俗に言う Black Thursday で終焉を迎えるが、まさにその瞬間までほとんどのアメリカ人はアメリカの繁栄は永遠のものであり、アメリカの社会にはなんの問題も存在しないと妄信していた。

1919 年ヴェルサイユ講和条約の締結から Black Thursday に至る狂喜と繁栄の 10 年間のほぼ折り返しである 1925 年、偶然にもアメリカ文学もまた American Renaissance を経てその独自の文学における 1 つの円熟期を迎えていた。しかし成功に酔いしれ浮かれ騒ぐアメリカ社会とは対照的に 1925 年に出版された作品はその建国当初からその時代まで理想の国アメリカに生きる人々を支えてきた American Dream に裏切られ、繁栄に酔いしれる社会にも見捨てられ、絶望の中で破滅へと向かうというアメリカ社会の歪に目を向けたものが際立っている。現代に生き過去の負の歴史を学んだ我々の視点から見れば、彼らの描いたアメリカ社会の負の側面はあまりにも当然のもののように写るかも知れない。しかし実際に繁栄の中に身を置き、その恩恵を直に享受した人間がその社会の闇を描くことは決して容易なことではない。しかし例えその現実が受け入れがたく目を背けたいくなるようなものでも、物質的な豊かさに満たされた人々が目を向けようとしない現実と真っ向から向かい合い、その本質的な問題を探り出し、ありのままに描くことで、人々に社会に潜むその闇を直視させ、問題の解決を図ることこそが作家の本分の 1 つなのである。

Theodore Dreiser(1871-1945)、F. Scott Fitzgerald(1896-1940)そして John Dos Passos(1896-1970)、3 人はともに 20 世紀前半のアメリカを代表する偉大な作家であるが、フロンティア消滅以前に生まれた Dreiser と 20 世紀の幕開けの直前に生まれ所謂失われた世代に属する Fitzgerald と Dos Passos では世代が 1 つ異なる。また極貧のドイツ系移民の家に生まれ 1900 年に苦節 30 歳で *Sister Carrie* を世に出したものの不道德のレッテルを貼られた Dreiser と、第一次大戦直後の 1920 年若くして *This Side of Paradise* で成功を手にし、一躍彼らが名づけたジャズエイジ(the Jazz Age)の寵児となった Fitzgerald、そしてポルトガル系移民の成功した弁護士の子の私生児として生まれ Harvard で学び第一次世界大戦で苦い経験を味わった後に作家となった Dos Passos では生まれ育った環境、そしてその作品のスタイルに至っては全くと言っていいほど異なっている。そんな彼らだが偶然にもそれぞれがその代表作を書いたのはまさにこの 1925 年なのである。この 1925 年にアメリカ自然主義の巨匠 Dreiser は *An American Tragedy* で遅すぎる名声を手にし、The Lost Generation の若き旗手 Fitzgerald は悲願であった世に残る長編 *The Great Gatsby* を書き上げ、Dos Passos は James Joyce の *Ulysses*(1922)を思わせる今までとは全く異なった文学的スタイルを取り入れた作品 *Manhattan Transfer* を出版した。一見す

るとこれら3つの作品は全く異なったもののように見えるかもしれない、事実 Dreiser の粗野だが力強い自然主義の文体、Fitzgerald の流れるような美しいリズムを奏でる文体、そして Dos Passos のような視野の広く芸術的な文体は我々日本人でさえ3人が全く別種の作家であることを感じさせる。その一方でこれら3つの作品をすべて読んだ者は読み終わったときになぜかどの作品でも同じようなカタルシスを感じたことに気がつくに違いない。

その大きな原因の1つはこれら3作品のテーマとそれを紡ぎ出すプロットにある。これら3作品の根底にあるものはアメリカの成功の夢という神話、そしてその崩壊にある。いずれの主人公にも共通するのは取り付かれているかのような成功への強い渴望であり、それが成功を象徴するような美しい女性と切り離しがたいまでに強く結びついていることである。物質的に豊かになった1920年代のアメリカ社会においては男性の魅力も社会的地位とそれに追従する富と切り離して考えることは出来なくなっていた。男性にとっての成功が美しく魅力的な女性を手に入れることなら、社会進出の手段が限られていた女性にとっての成功は社会的そして金銭的成功を手中にした男性を手に入れることなのである。Clare Virginia Eby はこの点に関し *An American Tragedy* と *The Great Gatsby* を “Dreiser and Women” において比較しこう述べている。

Along with Fitzgerald's *The Great Gatsby*, published the same year, *An American Tragedy* explores the constraining force of social class on individual freedom, while investing women the combined power of sexual appeal and social position. (Clare 154)

もちろん資産家の令嬢である Sondra Finchley を手に入れることで社会的成功と女性を同時に手に入れることのできる Clyde Griffith と、貧しさの故に失った過去の恋人である Daisy Buchanan を取り戻すためには物質的成功が不可欠であり、それを手に入れざるを得なかった Jay Gatsby では目的と手段という意味においては多少状況が異なるかもしれない、しかし二人とも貧しい生い立ちの中で金持ちであり美しいまさに成功の象徴のような女性に憧れ、そして決して手に入れることのできないその幻影を追い求めて破滅に至ったという点においては共通している。また2人はともに理想の女性を手に入れる過程で犯罪に手を染める結果となり、社会的に抹殺され、追い求めて止まなかったその理想の女性にすら顧みられることはないのである。

複数の登場人物の物語が複雑に絡み合う *Manhattan Transfer* においてはこの原則は当てはまらないように見えるかもしれない。この作品において最も焦点があてられ、主人公的な要素を持つ Jimmy Herf は幼くして両親を失うものの Clyde や Gatsby に比べれば育ちのいい青年であり、そして二人のように物質的な成功に取り付かれてまではいないし、

金がすべてを解決するとは思っていない。しかしこの作品において最も焦点のあてられる女性の登場人物であり Jimmy がその過去を受け入れ、愛し一度は結婚までした Ellen Thatcher は Sondra や Daisy のようにまさに金の声のする美しい女性だった。彼女と暮らすためには無尽蔵の金とそれを支え生み出していく成功が必要だった。だからこそ Jimmy は金の必要性和繁栄に酔いしれるアメリカ社会への嫌悪との狭間で葛藤し、最後には Ellen と別れ狂乱の町である New York を去るのである。しかし Jimmy は去りに友人 Congo の金を融通するという申し出に対し“Thanks, it's not exactly money I need, that's the hell of it.” (342)と言ひ残し New York を去ることからも、自らこの成功に取り付かれた社会の矛盾に気づいているという点においては Clyde や Gatsby より一歩先にいる人物であると言えるかもしれない。Gatsby が純粋なまでに Daisy を追い求める過程で自分の行いに疑問を持つシーンはほとんど描かれず、むしろ彼の異常なまでの Daisy への固執は終始一貫している。そして彼は決定的な事故の後でさえも決して New York を離れようとはしなかった。このように Gatsby には Jimmy ほど明確な American Dream との決別はない。Clyde も湖での事件に至るまでに葛藤はあったにせよ成功という魅力に抗うことはできなかった。また事件の後も逮捕される危険性があるにもかかわらず自分の American Dream を体現する Sondra のいる町を離れようとはしなかった。こうして比較してみるとすべてを失い一見絶望の淵に瀕する Jimmy も金や女性、そしてそれらの存在する都市という自然主義の代表的な負の力に抗った意志の強い主人公と言える。Townsend Ludington は Dreiser の作品と Dos Passos の作品を自然主義の観点から比較し以下のように述べている。

His [Dos Passos's] is not the world of *Sister Carrie*, where some sort of malevolent force slams the safe door on Hurstwood, or the individual is no more than a wisp in the wind, driven by “chemic compulsion,” as Dreiser would have it. (Townsend 40)

Ludington は Dreiser の処女作である *Sister Carrie* の中でなすすべもなく自然主義的負の連鎖に巻き込まれる悲劇の登場人物 George Hurstwood と比較することで Dos Passos の作品は物質主義や産業の巨大さ(materialism and industrial bigness)と闘う人間の物語だと結論付けている。

だからといって決して *The Great Gatsby* や *An American Tragedy* に希望の要素がなく絶望のみの終わりになっているかというそうではない。*The Great Gatsby* では Gatsby こそ Daisy の身代わりかのように撃ち殺され非業の死を遂げるが、一方で語り手の Nick Carraway が New York を去る前に波止場にたたずむ最後の場面は絶望と同時に力強く未来への希望が描かれている。*An American Tragedy* の最後の場面も一見すると冒頭の場面

の繰り返して、自分の犯した罪に確信の持てないまま死刑となった Clyde の甥がかつての Clyde がしていたように街頭で宗教活動をしており悲劇の繰り返しを予兆させる、しかしむしろこの場面により読者は同じような悲劇が繰り返されることを避けなくてはならないと強く感じるはずである。また Dreiser はこのような悲劇の解決策を生前出版することの叶わなかった長編やエッセイにおいて書き続けていた。不幸にもそれらは多くの読者の目に留まる機会はなかったが、Dreiser もまた成長を続ける資本主義社会の強大な力に翻弄されるだけでなく、それに立ち向かう人間に希望を見出していたのである。彼らアメリカの作家は決してフランスの自然主義作家 Emile Zola(1840-1902)のような徹頭徹尾社会の強大な力に翻弄される悲劇を描いたのではなく、アメリカという新世界に絶望せず希望を持ち続け、1人でも多くの読者にアメリカ社会の問題点を認識してもらおうとしていたのである。これはまさに Malcolm Cowley や Charles Walcutt の指摘するアメリカ自然主義文学の特徴であろう。その解決方法こそ3者3様ではあるが、彼らの文学は American Dream という人間を翻弄する自然主義的な力に屈するだけの物語で終わることはなかった。

またこのような主人公たちの悲劇に対するそれぞれのヒロインの対応はこれら3作品において主人公たちの末路よりも同じパターンをなしている。Sondra は Clyde の逮捕後は資産家である父の助けもありその名前も明かされることなく安全な場所に姿を隠した。Daisy も自分の身代わりとなった Gatsby の葬式にすら顔を見せることなく、夫 Tom Buchanan とともに結局は安全な場所へと姿をくらます。Jimmy と離婚した Ellen は昔からの求愛者であり今ややり手の弁護士として大成功し政界へと進出する George Baldwin と再婚して再び安寧な暮らしを得ようとしていた。しかし悲劇の当事者である主人公 Jimmy の場合と同様 *Manhattan Transfer* の Ellen は他の2作品のヒロインと少し違う描かれ方をする。Sondra や Daisy が主人公の決定的な悲劇の場面の後に全くストーリー上に姿を見せないのとは対照的に Ellen は Jimmy と別れた後のエピソードが詳細に描かれる。しかも彼女は “There’s a horrible tired blankness inside her.” (356) という一文が暗示するように成功や金に支配された社会、そしてその社会にどっぷりとつかってきた自分の人生の空虚さに気がつき始めている。その意味において彼女の目覚めは始まっており、Ellen は Sondra や Daisy とは異なった新しい時代の女性であると言える。

ヒロインの反応だけではなく、過度に発達した資本主義社会の中でそれぞれの主人公たちの悲劇を生み出す隠れた原因となっている他の登場人物たちの不寛容、無責任、墮落、そういったアメリカ国民の精神的な問題こそ作家たちが 1920 年代のアメリカの社会の栄華に酔いしれる人々に伝えたかった現実である。

*An American Tragedy* においては貧しい少年だった Clyde は少年時代から富に憧れ貧困を忍み嫌っていた。それ故彼は富を得るために自分が正しいと思わないまでも、せざるを得ないことだけをしたのである。彼は “But if my conscience tells me that I am right, is

not that enough?" (847) というように最後まで自問自答し続ける。しかし彼の母も彼の最後を看取った Reverend Duncan McMillan も彼を心から理解しようとはせず、そしてまたアメリカ社会に至っては彼を残忍な殺人犯と最初から決め込み彼をアメリカ社会の生贄として抹殺した。

Gatsby の末路も Clyde 同様アメリカ社会の犠牲者の様相を見せている。Clyde と同じように貧しい家庭に育った彼の望みは若きころに愛した理想の女性 Daisy を手に入れることだけだった。それ故彼女を手に入れるための行為は彼にとってはすべて正当化されるものだった。Clyde とは異なり Gatsby には自分の正しさに対して確信があったことは対照的である。しかしそのような彼の時として大掛かり過ぎる奇行は語り手である Nick Carraway にすら当初は理解されない。しかし Gatsby の死の後彼のパーティに夜毎訪れた多くの群集も彼の仕事仲間の Meyer Wolfsheim も Daisy も彼の富に群がった誰も彼の葬式に訪れもしなかった。Nick が Tom との再会の後に Gatsby の事件を振り返ってこのように独白する場面は非常に興味深い。

It was all very careless and confused. They were careless people, Tom and Daisy—they smashed up things and creatures and then retreated back into their money or their vast carelessness, or whatever it was that kept them together, and let other people clean up the mess they had made. . . . (179)

ここで Nick が感じたことは *An American Tragedy* を読んだ読者が感じたことを代弁しているかのようでもある。Clyde や Gatsby に間違ったところがあつたにせよ、そのような彼らを生み出したのはアメリカ社会なのである。そしてまたアメリカの社会には彼らよりも悪いことをしていてもなんの犠牲も払わずのうのうと暮らしている人物もいるのである、それにもかかわらず Clyde や Gatsby のような人間だけが犠牲者となる社会の矛盾が 2 つの作品では浮き彫りになっているのである。

*Manhattan Transfer* において Jimmy は Clyde や Gatsby ほどの悲劇には陥っていない、しかしながら New York という常に発展し続ける競争社会において Jimmy は完全に落伍者であった。彼は新聞記者として事実を報道するジャーナリストを志す若者であったが、書きたいことを書くことも出来ず、意味のないゴシップを創り上げる新聞社、そしてそれを喜ぶ大衆に嫌気が差し "If only I still had faith in my words." (327) というように最後には言葉に対する信頼まで失ってしまう。そんな彼を Ellen も友人たちも理解することは出来ない。どんな尊い理想を持ったところで金を稼ぐ能力のない Jimmy はアメリカ資本主義社会にとっては無用の長物なのである。しかし彼は最後そのアメリカ資本主義社会の象徴的都市である New York "the City of Destruction" (327) を脱出することで更なる悲劇から逃れ、自己の回復へと旅立つ。これはある意味では Dos Passos が我々に提示した当

時の社会にあふれるこのような悲劇の数々から逃れ自己への信頼を回復するための手段だと言える。Charles Walcutt は Jimmy の New York 脱出に言及し以下のように述べている。

The idealism of the American Dream is present as indignation and bitterness at the condition which have thwarted that Dream, but this is so only if the reader deduces it from the ironic juxtapositions and from the overtones of Dos Passos' language, which shows the city always incredibly bright and polished, while its lives are dull and morally sterile. (Walcutt 282)

一見華やかなアメリカの大都市の空虚で劣悪な正体、そして American Dream の負の側面を我々読者は Dos Passos の作品、そしてまた Dreiser、Fitzgerald の小説から学び取ることができる。彼らは誰よりも早くアメリカの資本主義と American Dream の抱える問題点に注目し、それらに苦しむ人間の姿を描くことで、その解決方法を模索し続けた作家なのである。

無論 3 作品の主張や背景が全部同じだというつもりはない。 *The Great Gatsby* や *Manhattan Transfer* には第一次世界大戦や禁酒法の影響が強く見られ Fitzgerald、Dos Passos の両作家が失われた世代の作家である、それ故に Gatsby、Jimmy という若い主人公たちもその影響を色濃く受けている。一方で Jerome Loving が

Both Nick Carraway and Jay Gatsby in Fitzgerald's novel have served in the war (while Tom Buchanan apparently has not), but nobody in *An American Tragedy* seems to have ever heard of either the Great War or Prohibition. (302)

と指摘するように Dreiser の小説には大戦や禁酒法の影響が全く見受けられない。これは先にも述べたが Dreiser の世代が二人とは違うためもあるであろう。それ故に Dreiser と 2 人の小説を読んだ時に受ける印象は大きく異なる。しかし彼ら 3 人が描いた時代は同じであり、描こうとしたアメリカの社会の根底に潜む闇は共通しているのである。そしてその闇は今も変わらずアメリカ社会に潜んでいるのである。世界大恐慌からおよそ 80 年の年月が流れた 2008 年現在、当時の悲劇など誰もが忘れかけていたアメリカ社会はサブプライムローンに端を発する大恐慌に再び震撼することとなる。そしてニューヨーク株式市場は大きく値を下げ、市場は混乱し、多くの有名企業までもが倒産や公的資金投入の憂き目にあった。その余波は今日のグローバル社会にあっては遠く日本にまでも及んでいる。そして人々は再び見ようとしなかった社会の闇という問題点に気がつき始める。歴史は繰

り返すと言うがまさにその通りである。一見問題がなかったようなこの前までのアメリカ社会にも貧富の差に苦しみ、成功の夢に取り付かれ、社会から落伍し、打ち捨てられた第二の Clyde が、Gatsby が、そして Jimmy がいたのであろう。これからのアメリカ文学にとって重要なことは彼ら同時代に生きた 3 人を別々の作家として主義やスタイルで色分けすることではなく、彼らが描こうとした作品の根底にある共通の概念を探り出すことにあるのではなからうか。それは即ちアメリカの最初の大危機から今日まで続く本質的なアメリカ社会の問題点を探ることであり、彼らの残した資本主義社会への警鐘を正しく理解することはこれからも起こりえる繰り返すアメリカの悲劇の最大の予防方法なのである。

#### 参考文献一覧

##### 作品

- Dos Passos, John. *Manhattan Transfer*. London: Penguin, 1987.  
Dreiser, Theodore. *An American Tragedy*. Ed. Richard Lingeman. New York: A Signet Classic, 2000.  
Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. New York: Scribner, 2004.

##### 批評

- Cowley, Malcolm. *A Many-Windowed House: A Collected Essays on American Writers and American Writing*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1970.  
Kazin, Alfred. *On Native Ground*. New York: Doubleday & Company, 1956.  
Lingeman, Richard. *Theodore Dreiser: An American Journey*. New York: John Willy & Sons, 1993.  
Loving, Jerome. *The Last Titan*. Barkley and Los Angeles, California: University of California Press, 2005.  
Ludington, Townsend. "Explaining Dos Pssos's Naturalism" *Studies in American Naturalism Summer and Winter 2006, Vol. 1, Nos. 1 and 2*, 2006.  
Pizer, Donald. *Twentieth-Century American Literary Naturalism: An Interpretation*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1982.  
Virginia Eby, Clare. "Dreiser and Women" *The Cambridge Companion to Theodore Dreiser*. Ed. Leonard Cassuto and Clare Virginia Eby. Cambridge: Cambridge University Press, 2004. 142-159.



Walcott, Charles Child. *American Literary Naturalism, A Divided Stream.*  
Minneapolis: University of Minnesota Press, 1956.

映像資料

『NHK スペシャル 映像の世紀 第3集 それはマンハッタンから始まった』